

群馬県の鍋被り葬・鉢被り葬と出土人骨

榎 崎 修一郎

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4. 群馬県の鍋被り葬・鉢被り葬の考古学的事例 |
| 2. 鍋被り葬・鉢被り葬の解釈 | 5. おわりに |
| 3. ハンセン病 | |

— 要 旨 —

「鍋被り葬」あるいは「鉢被り葬」は、被葬者の頭部に鉄鍋や播鉢を被せて埋葬するという特殊な葬法である。この葬法の解釈としては、「病気説」と「お盆説」とがあり、民俗事例では「病気説」は東北地方に多く、「お盆説」は関東地方や西日本に多い傾向があり、群馬県においては「お盆説」が有力である。

本稿では、群馬県出土鍋被り葬・鉢被り葬と出土人骨を再検討した。群馬県においては、横瀬古墳群（富岡市）・二之宮谷地遺跡（前橋市）・下高瀬上之原遺跡（富岡市）・宮崎浦町遺跡（富岡市）・塚越遺跡（桐生市）の5遺跡が認められている。

横瀬古墳群の2号墓坑は鉄鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であり、被葬者には古病理として梅毒の可能性が認められた。しかしながら、今回、本遺跡人骨を実見することはできなかった。二之宮谷地遺跡の61号墓坑は播鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、被葬者には古病理は認められなかった。今回、本人骨の顔面部を復元し、写真及び計測値を掲載した。下高瀬上之原遺跡の4号土坑は、片口鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、被葬者には古病理は認められなかった。今回、本人骨のクリーニング・復元・観察・計測を行い、写真及び計測値を掲載した。宮崎浦町遺跡の1号墓坑は播鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、2号墓坑は鉄鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であったが、残念ながら人骨は取り上げておらず被葬者の古病理の有無の確認は不可能であった。塚越遺跡は、内耳鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であるが、人骨を実見することはできなかったため、被葬者の古病理の有無の確認はできなかった。

群馬県においては、5遺跡6例が知られており、「鍋被り葬」が3例・「鉢被り葬」が3例と半々に認められた。この内、人骨が調査されているのは、3遺跡3例であり横瀬古墳群2号墓坑出土人骨には梅毒の可能性が認められたが、他の2例には古病理は認められなかった。但し、ハンセン病及び梅毒は、罹患していても人骨に痕跡を残す割合は低いために、確実に病気に罹っていないかとまでは断定できない。現在のところ、群馬県においては「お盆説」が有力であることが推定された。

キーワード

対象時代 中世・近世

対象地域 日本・群馬県

研究対象 鍋被り葬・鉢被り葬・古病理

1. はじめに

「鍋被り葬」あるいは「鉢被り葬」は、中近世の墓坑で被葬者の頭部に鉄鍋や搦鉢を被せて埋葬するという特殊な葬法である。分布域は、中部・関東・東北地方と主に東日本に多く発見されている(桜井、1992・2001・2004；関根、2004)。

この特殊な葬法の民俗学的説明として、「ハンセン病で亡くなった者」という病気説・「お盆の期間に亡くなった者」というお盆説・前出の「双方」という双方説の3つがある。

大きな傾向としては、東北地方には病気説が、関東地方・西日本にはお盆説が、茨城県・神奈川県・長野県では双方説が知られている(桜井、2004)。お盆説については、お盆にはあの世から仏様が帰ってくるのに、逆にお盆に死んであの世にいく。そうすると、皆にいじめられて頭を殴られるので、痛くないように鍋を被せて埋葬すると説明されている。

なお、本稿では、現在では「ハンセン病」と呼ばれ使用されない「癩病」あるいは「癩」という用語を使用しているが、これは、歴史的記述を扱うためであることを付記しておく。

2. 鍋被り葬・鉢被り葬の解釈

「鍋被り葬」あるいは「鉢被り葬」の解釈には、「お盆死亡説」と「病気死亡説」とがあり、場所によってはその両方の折衷説がある。

(1) お盆死亡説

お盆死亡説は、関東地方や西日本に記述が認められる。以下に、文献から事例を紹介する。

- ①徳島県海部郡海陽町(旧穴喰町)では「死者にスリ鉢をかぶせ」というとある(土井、1983)。
- ②愛知県豊橋市(当時、三河吉田領)の江戸時代の文献には、以下のような記述がある。
「盆前に死にたる者には、焙烙を冠せて葬る也。さるは途中にて聖霊に行違ふ時に、我々は娑婆へ行くを何とて冥途へは来るぞと云ひて頭をたたくなり。其時に此焙烙なくては頭が痛む故なりとぞ。……此月中は焙烙を買ふ事を忌むもの多し。」(土井、1983)
- ③愛知県幡豆郡一色町(旧幡豆郡佐久島村)及び同県知多郡南知多町(旧知多郡日間賀島村)では、「盆の十三日に往生した者には焙烙を被せる。それは仏に行きあうときに頭を叩かれるからである」(平瀬、1979)。
- ④長野県諏訪地方では「死者に小鉢をかぶせる」というとある(土井、1983)。
- ⑤長野県伊那市(旧上伊那郡美和村)では、「盆のときに死んだ者、または七月に入ってから死んだ者、或いは七月も七日以後に死んだ者に、ヒキバチを被せる風がある」(平瀬、1979)。

⑥埼玉県幸手市(旧北葛飾郡幸手町)では、「盆迄に四十九日の忌明けの終らぬ死者には搦鉢を被せる」(平瀬、1979)。

⑦栃木県足利地方では、「盆中に死んだ者には搦鉢を被らせる」(平瀬、1979)。

⑧群馬県渋川市(旧勢多郡北橋村)では、「盆迄に四十九日の忌明けが終らぬ死者には、半紙に搦鉢の絵を書いて頭に載せてやらぬと、あの世で頭を叩かれる」(平瀬、1979)。

⑨群馬県においては、「盆前四十九日内の死者に対しては搦鉢を被せるとあり、最近では搦鉢の絵を載せておく」という(都丸、1972)。

(2) 病気死亡説

病気死亡説は、東北地方を中心に主に東日本に記述が認められる。

- ①山形県高畠町では「らい病等で死亡した人の場合は、遺体の上になべをかぶせた」(桜井、2004)。
- ②新潟県新発田市では「ドス(ハンセン病)で死んだ者の棺には鍋を被せて埋めた」とある(桜井、2004)。
- ③滋賀県や石川県の事例では「ハンセン病の場合、鍋をかぶせて埋めた」とある(土井、1983)。

(3) 双方説

双方説は、お盆死亡説と病気死亡説の両方の説があるもので、茨城県・神奈川県・長野県に認められる。茨城県では、「癩病や結核等で死亡した者・盆の期間に死亡した者・新しい村に住んだ者が死亡した場合、土鍋・鉄鍋・搦鉢・焙烙を被せて埋葬する」という(桜井、2004)。

3. ハンセン病

(1) ハンセン病

ハンセン病は、結核菌と同じ坑酸菌の仲間属する癩菌(*Mycobacterium leprae*)によって生ずる感染症である。

この病気は、人類に顕著に認められるが、チンパンジーやアルマジロにも認められる。ハンセン病は、1873年にノルウェーの微生物学者 A.G.H. ハンセンにより発見されて発見者にちなんで命名された。

(2) ハンセン病の起源

ハンセン病の起源はよくは確かめられていない。文献では、紀元前600年のインドの医学書に記載が認められるという。一説には、アレクサンダー大王の東征により、地中海地方やヨーロッパにもたらされたと言われている(Steinbock、1976)。

(3) 日本におけるハンセン病の歴史

文献では、『日本書紀』に、推古天皇の20(612)年に、百済からの帰化人に白癩の記載が認められる(山本、1997)。また、天長10(833)年の『令義解』には、悪疾とは白癩であるという記載がある(山本、1997)。但し、



図1 「鍋被り葬」・「鉢被り葬」人骨出土地 [桜井 (2004) を改変]

病気死亡説：青森県・岩手県・宮城県・山形県・福島県・新潟県・千葉県・石川県に認められる。
 お盆死亡説：栃木県・群馬県・埼玉県・東京都・愛知県・奈良県・鳥取県・大分県に認められる。
 双方説：茨城県・神奈川県・長野県に認められる。

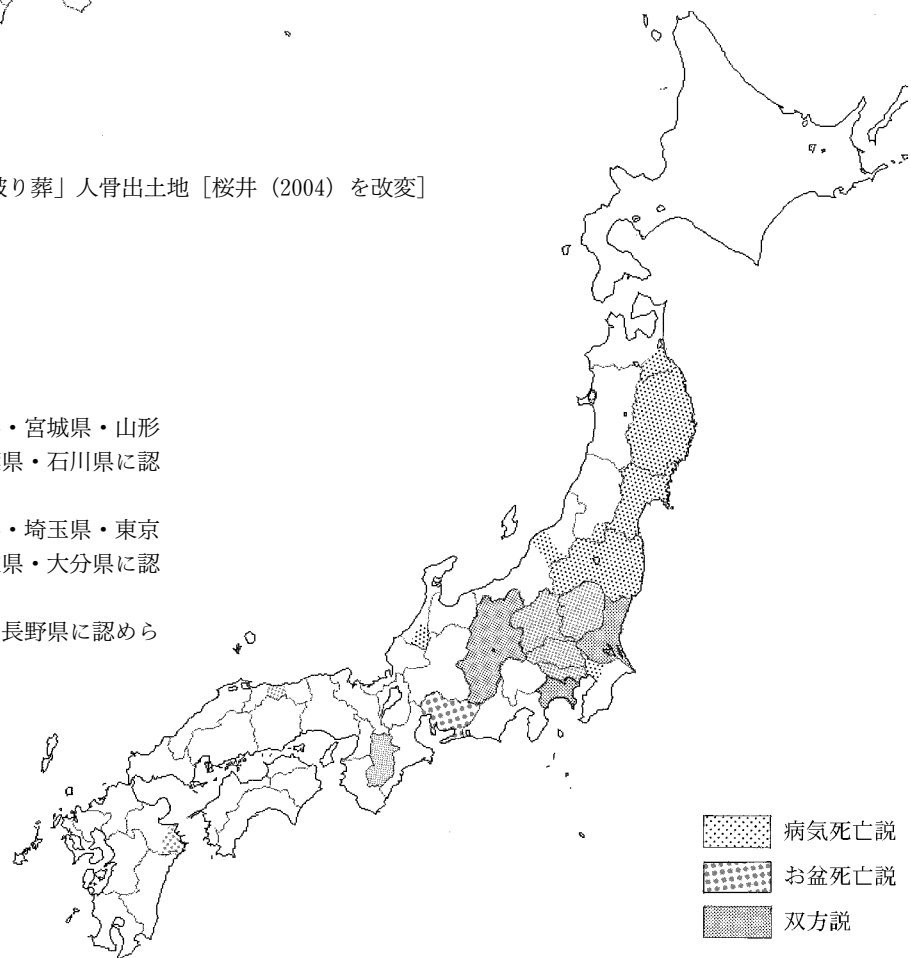


図2 「鍋被り葬」・「鉢被り葬」民俗事例伝承地 [桜井 (2004) を改変]

これらの文献記載は、本当にハンセン病なのか、あるいは梅毒や結核等の症状と混同されている可能性もある。

出土人骨で確かめられた事例は、非常に少ない。青森県根城跡から頭部に内耳鉄鍋を被せた状態で出土した江戸時代（1600年頃）の壮年期女性人骨による報告（森本、1995）と神奈川県由比ヶ浜南遺跡出土の中世前期に属する熟年期女性人骨による報告（平田他、2001）がある。

前者の根城出土人骨には切歯窩の異常な拡大が認められており、後者の由比ヶ浜南遺跡出土人骨には四肢骨に肉芽腫性炎症及び中手骨や足の末節骨に菲薄化し鉛筆の先のような状態が認められたという。

東京都老人総合研究所の古病理学者、鈴木隆雄によると、1959年に発掘調査が行われた神奈川県極楽寺遺跡出土人骨にハンセン病の疑いのある人骨が含まれているという（鈴木、1998）。しかしながら、これらの人骨は未報告であるため、将来的な精査が望まれる。

(4) ハンセン病の症状

ハンセン病の病型には、①癰腫型・②類結核型・③未定型・④混合型の4種類に分かれる。①の癰腫型では、慢性的鼻炎と顔面中央部の骨の破壊を引き起こし、②の類結核型では四肢末梢の神経に萎縮が起きるために、手や足の指の骨に変形がもたらされるといい、骨にまで病変が残る率は、約15%～77%であるというが、15%程度が正しいという意見もある（鈴木、1998）。

(5) ハンセン病の骨病変

ハンセン病の骨病変としては、顔面頭蓋部の鼻の梨状口下縁と前鼻棘の骨萎縮・上顎骨中央部の萎縮と歯槽部の後退による切歯の生前脱落・硬口蓋表面の炎症性変化による骨の菲薄化や小孔・多孔の形成が特徴的である（鈴木、1998）。

ハンセン病と一部で症状が似る梅毒では、頭蓋全体の病変・鎖骨・胸骨・上腕骨両端部・橈骨・尺骨・大腿骨下半部・脛骨が特徴的である。

また、同様に結核では、結核性骨関節炎が上腕骨・大腿骨・脛骨の両端部に認められる。さらに、結核性脊椎炎（脊椎カリエス）の場合には、脊椎に強度の変形が見られる。腰椎では約50%・胸椎では約40%に認められるという。

ハンセン病と他の病気とを区別できる部位は、顔面中央部及び手足の末節骨・中手骨・中足骨・脛骨・腓骨ということになる。しかしながら、現実的には、中近世の人骨で手足の骨が良好に残存することは非常に少なく、海岸部で発見された由比ヶ浜南遺跡の場合は例外的と言わざるを得ない。そこで、群馬県の現状も含めて、通常は、顔面中央部に着目し、さらに、脛骨と腓骨の両方が罹患している場合はハンセン病の可能性が高いと言えることになる。

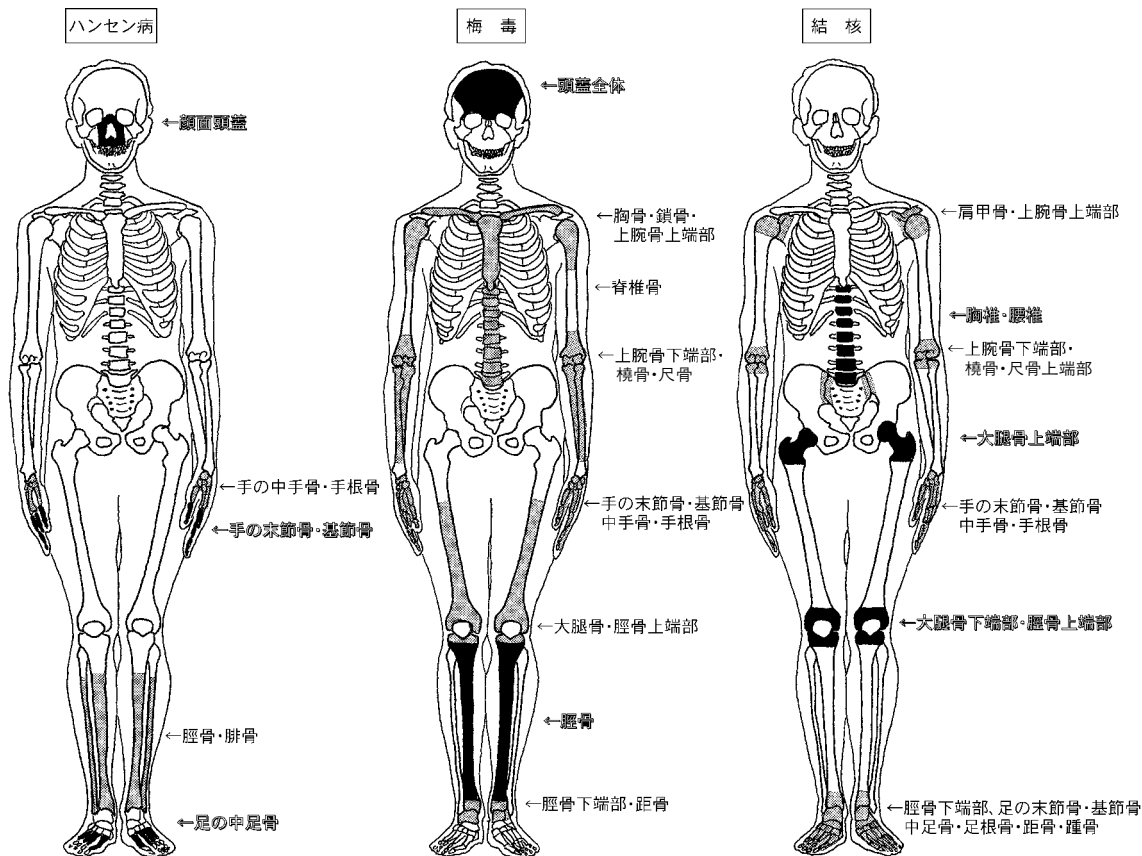


図3 「ハンセン病」・「梅毒」・「結核」の骨病変好発部位 [Steinbock (1976) を改変]

4. 群馬県の鍋被り葬・鉢被り葬の考古学的事例

群馬県においての、鍋被り葬・鉢被り葬の考古学的事例は、横瀬古墳群(富岡市)・二之宮谷地遺跡(前橋市)・下高瀬上之原遺跡(富岡市)・宮崎浦町遺跡(富岡市)・塚越遺跡(桐生市)の5遺跡が認められている。以下に、報告書の刊行年順に検討する。

(1) 横瀬古墳群〔よこぜ古墳群〕

所在地：群馬県富岡市上高瀬西横瀬・松ノ木谷戸

発掘調査：群馬県富岡市教育委員会

調査期間：1987(昭和62)年9月～1988(昭和63)年11月

報告書：『横瀬古墳群』(1990年)

遺構：古墳時代後期の古墳群。

墓坑：4号墳の墳丘上から、2基の墓坑が出土した。この内の2号墓坑が、鉄鍋の鍋被り葬であると推定されている。残念ながら、報告書には、2号墓坑の規模・平面図・写真の記載は無い。しかしながら、出土人骨の報告の中に、直径約64cmと記載されている。

時代：近世

副葬品：注口付鉄鍋1点・短刀1点・煙管〔雁首〕1点・寛永通宝15点。報告書には、副葬品の内、短刀のみ実測図が掲載されているが、鉄鍋の実測図の掲載は無い。

被葬者：被葬者は、壮年期後半の男性1個体である。左右の脛骨及び左右腓骨の内側面に、増殖性骨膜炎の古病理が認められた(森本・吉田、1990)。本出土人骨について、富岡市教育委員会に出土人骨の有無を問い合わせたが、同教育委員会には保管していないとの回答を得た。恐らく、出土人骨を記載した聖マリアンナ医科大学が保管しているとのことで、実際の出土人骨を観察することはできなかった。したがって、以下に故森本岩太郎と吉田俊爾〔現、日本歯科大学〕による人骨報告を抜粋する。なお、当該報告書には人骨及び歯の計測値の記載は無い。

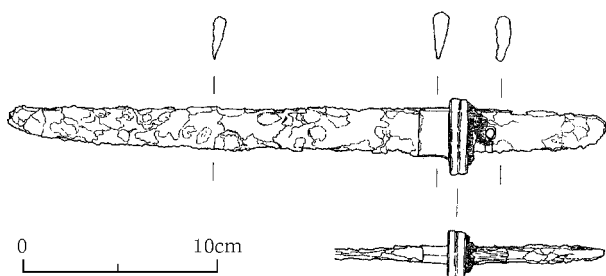


図4 横瀬古墳群2号墓坑出土短刀実測図(富岡市教委、1990)

森本・吉田(1990)より抜粋

出土人骨の埋葬状態：写真で人骨の解剖学的位置関係は自然であること、墓坑の大きさが直径64cmであること等を考慮し、座位の姿勢で埋葬されたと推定。鉄鍋は、人骨を被うように最上部から出土した。

出土人骨の残存状態：

①頭蓋 左右の頬骨・頭蓋底・前頭の中央部・下顎骨を除く顔面頭蓋の中央部等が欠損している。下顎骨は右下

顎枝を欠く。

②脊柱 腰椎の上下間接突起片が1個・仙骨前面の破片が2個ある。肋骨片が2個ある。

③上肢骨 左右の上腕骨・左橈骨・左右の尺骨がある。

④下肢骨 左右寛骨・左大腿骨・右膝蓋骨・左右脛骨・左右腓骨が残っている。左寛骨は、寛骨臼月状面・腸骨体の破片が残存している。右寛骨は、寛骨臼・腸骨体・腸骨翼下部が残存している。右寛骨の大座骨切痕は完全に残っていないが、その形態は鋭い湾曲を示す。左大腿骨は、上端を欠く。脛骨は、左が上端と骨体中央部約10cm・右が骨体上部3分の1残っている。腓骨は、左骨体の下半、右骨体の3分の1・上部片約5cmが残っている。

⑤手の骨 右の有鉤骨・月状骨等の手根骨、左右不明の中手骨片4個、指骨3個。

被葬者の個体数：1個体。

被葬者の性別：男性。乳様突起は比較的大きく膨隆し、外後頭隆起の膨隆度はブローカ〔Broca〕の第2度である。

被葬者の死亡年齢：壮年期。3主要縫合は、内外板とも骨結合化は見られない。歯の咬耗度は、マルティン〔Martin〕の第2度である。

被葬者の形態：鼓室骨裂孔・副頤孔は左右とも無く、インカ骨も認められない。下顎骨の下顎角は鋭く外側に張り出し、いわゆるエラの張った顔貌の持ち主だったと想像される。歯槽性突顎がある。左大腿骨体の断面示数は、上部が73.3で超広型に属し、中央部が124.0を示し、強いピラステルの形成が見られる。

被葬者の古病理：

①齲蝕〔虫歯〕 下顎右M1〔第1大臼歯〕・同M2〔第2大臼歯〕には、齲蝕が認められる。

②増殖性骨膜炎〔梅毒の疑い〕 左右の脛骨体内側面上部にはやや広汎性に増殖性骨膜炎像が認められる。左右腓骨体片の内側面には、広汎性に増殖性の骨膜炎像が認められる。これらの炎症像を観察すると、骨表面は凹凸で骨増殖している部分の中に、小孔が無数に見え、慢性的に疾病が経過したことが伺える。この場合、原因疾患としてまず考えられるのが梅毒である。梅毒の骨での好発部位は頭蓋・胸骨・鎖骨・脛骨・腓骨と言われ、また両側性に発病するのが特徴という。四肢骨で梅毒性の炎症が進むと骨体が肥厚し、髓腔が狭窄すると言われるが、そこまで病状は進行していない。梅毒の経過は長いので、個体の年齢が壮年期であることを考慮すればこの程度の病状であることは不自然ではない。また、2号墓坑壮年期男性人骨の場合は鉄鍋を被って埋葬されていた。このことは、本人骨が忌むべき疾病に属することを示唆するものであるかもしれない。しかし、今回見られた下腿骨の慢性骨膜炎像をただちに梅毒と言い切るだけの証明は無いので、ここでは梅毒である可能性を捨て切れないことだけを指摘するにとどめたい。

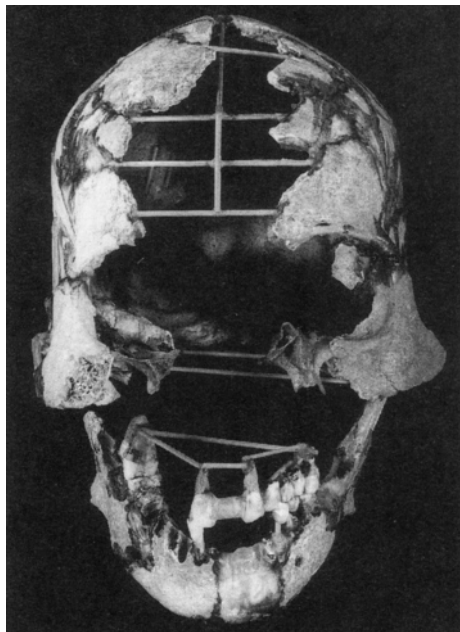


写真1-1. 頭蓋骨前面観

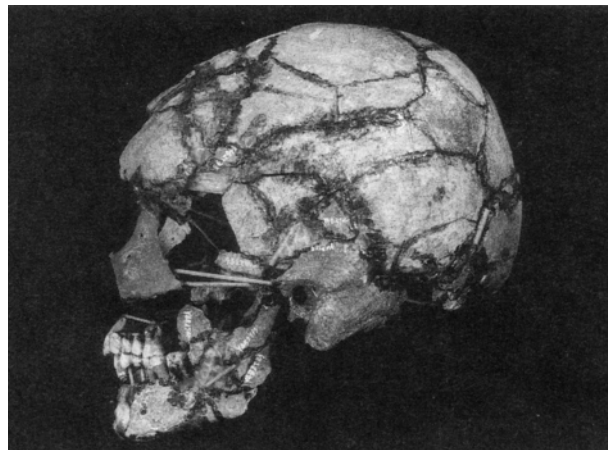


写真1-2. 頭蓋骨左側面観

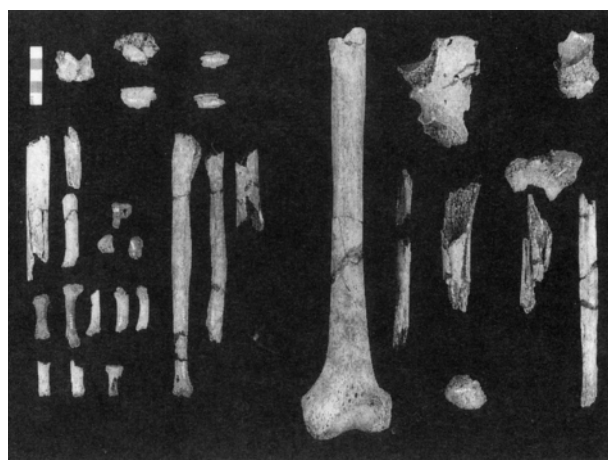


写真1-3. 四肢骨

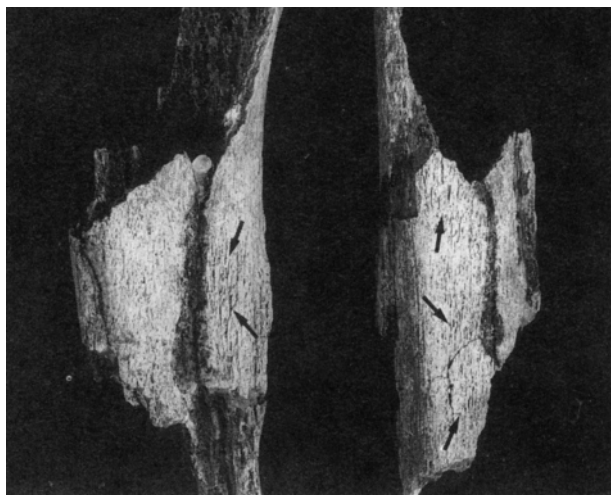


写真1-4. 左右脛骨古病理 (増殖性骨膜炎)

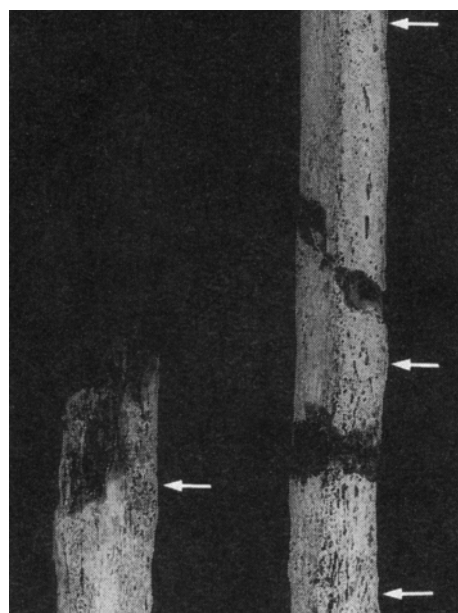


写真1-5. 左右腓骨古病理
(増殖性骨膜炎)

写真1 横瀬古墳群2号墓坑出土人骨 (森本・吉田、1990)

(2) 二之宮谷地遺跡 [にのみややち遺跡]

所在地：群馬県前橋市二之宮町谷地

発掘調査：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査期間：1986(昭和61)年9月～1987(昭和62)年8月

報告書：『二之宮谷地遺跡』(群埋文、1994)

遺構：古墳時代後期～奈良・平安時代竪穴住居・近世墓坑

墓坑：8基あり、その内61号墓坑は鉢被り葬である。

時代：近世

副葬品：播鉢1点・煙管火皿部1点・寛永通宝6点

土坑形状：不整形

土坑規模：長径90cm・短径71cm・深度80cm

被葬者：約10歳の男性被葬者が出土している。出土人骨には、ハンセン病や結核に罹患した痕跡が認められな

いことから、お盆の期間中に亡くなった人に対する儀礼であると推定している(宮崎、1994)。

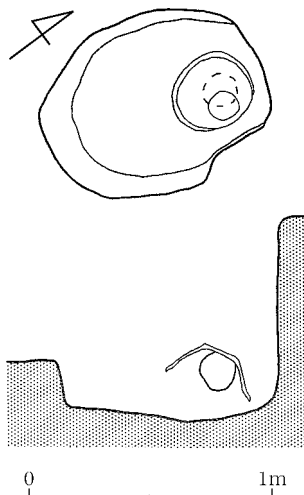


図6 二之宮谷地遺跡61号墓坑平面図
[群埋文(1994)を改変]

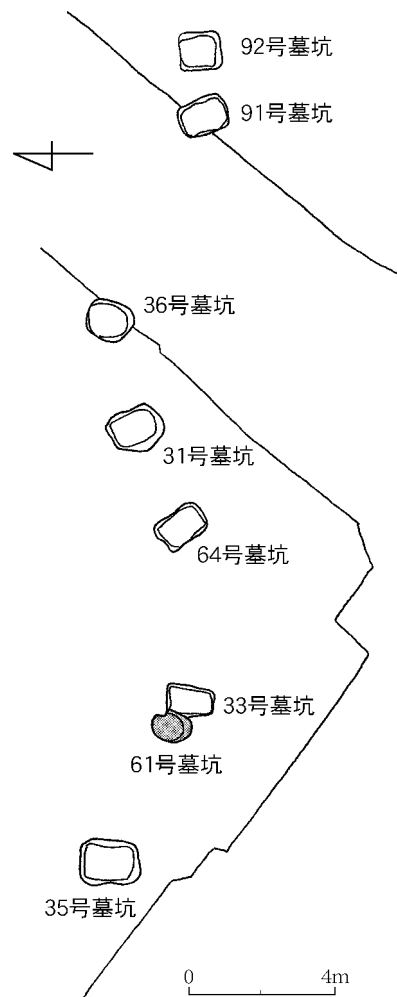


図5 二之宮谷地遺跡墓坑位置図
[群埋文(1994)を改変]

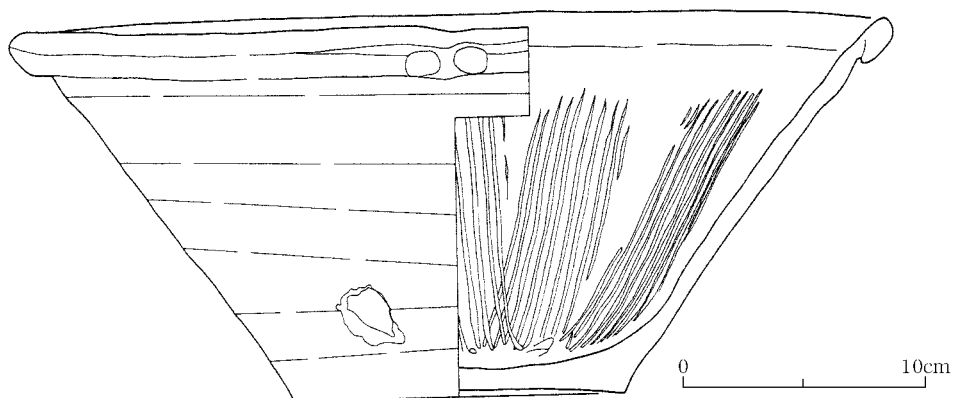


図7 二之宮谷地遺跡61号墓坑出土播鉢実測図(群埋文、1994)



写真2 二之宮谷地遺跡61号墓坑出土状況写真〔左：掘鉢を被った状態、右：掘鉢を取り除いた状態〕（群埋文、1994）



写真3-1 前面観



写真3-2 後面観



写真3-3 右側面観



写真3-4 左側面観



写真3-5 上面観

写真3 二之宮谷地遺跡61号墓坑出土人骨頭蓋骨

宮崎（1994）より抜粋

出土人骨の埋葬状態：頭頂部を北にし、顔を西に向けていたが、体幹骨・体肢骨の埋存状況は不明である。したがって、埋存姿勢はわからない。

出土人骨の残存状態：頭蓋骨以外は、わずかに残存。

被葬者の個体数：1 個体

被葬者の性別：男性

被葬者の死亡年齢：約10歳。脳頭蓋の縫合線は、外板・内板共にまだ癒合しておらず、口蓋縫合も癒合していない。軸椎の椎体骨端・踵骨の近位骨端部・指骨の近位骨端・中手骨の遠位骨端・第1中手骨の近位骨端がまだ癒合していない。上顎左第2乳臼歯、下顎左右第1乳臼歯・第2乳臼歯の5本がまだ乳歯として残存している。永久歯は、中切歯・側切歯・左上顎犬歯がすでに萌出し、萌出途上にある

被葬者の形態：

- ①頭蓋骨 頭頂部がやや高いが、眉弓はほとんど隆起しておらず、前額部は狭く前額部の側面観はほとんど鉛直で、前頭結節は発達している。上項線は発達が悪くはつきりせず、外後頭隆起はほとんど隆起していない。乳様突起は小さくて発達が悪く、眼窩は比較的小さい。下顎角はあまり発達しておらず、眼窩上切痕は湾状である。
- ②四肢骨 上腕骨の骨体横断面示数は80.8で、橈骨の骨体断面示数は67.6、大腿骨骨体中央横断面示数は97.3、脛骨の骨体中央部における脛示数は82.0で正脛である。

被葬者の古病理：上顎右第2乳臼歯の歯根は、近心側の3/4が齶蝕（C3）によりなくなっている。

本報告者註：

本報告者が、改めて古病理を観察したが、顔面部及び四肢骨には古病理は認められなかった。しかしながら、被葬者の死亡年齢が約10歳という点を考慮すると、骨に影響が出る前に死亡した可能性も考えられる。被葬者の齶蝕は、齶蝕では無く、乳歯から永久歯に萌え変わる際に歯根が吸収され、脱落する直前であると推定される。

報告書に、頭蓋骨計測値が掲載されており、それには、91号土坑とあるが、91号土坑出土人骨の頭蓋骨は残存状態が悪いため、これは、61号土坑頭蓋骨の計測値であると推定した。実際、人骨を再計測したところ、数値が一致した。

今回、本報告者が顔面部を復元し計測した結果、顔高[47]は93mm、上顔高[48]は53mmという結果を得た。

表3 二之宮谷地遺跡出土人骨まとめ

土坑No.	土坑形状	土坑規模(cm)			副葬品	被葬者		
		長径	短径	深度		個体数	性別	死亡年齢
31号土坑	隅丸長方形	125	104	38	寛永通宝11点	1個体	男性	熟年期～老年期
33号土坑	長方形	107	74	36	菊皿2点・寛永通宝13点	1個体	男性	熟年期後半～老年期
35号土坑	長方形	139	100	57	瀬戸美濃皿2点・寛永通宝8点	1個体	不明	壮年期？
36号土坑	隅丸方形	113	97	112	鉢1点・寛永通宝11点・印籠1点・ビーズ玉1点	1個体	女性	熟年期～老年期
61号土坑	不整形	90	71	80	播鉢1点・煙管火皿1点・寛永通宝6点	1個体	男性	10歳
64号土坑	長方形	90	71	80	皿1点・寛永通宝5点	1個体	女性	老年期
91号土坑	不整形	116	87	47	寛永通宝17点・渡米銭1点	1個体	男性	熟年期後半～老年期
92号土坑	方形	100	93	75	寛永通宝17点			人骨の残存状態が悪いため、不明

表1 二之宮谷地遺跡61号墓坑出土人骨頭蓋骨計測値(宮崎、1994)

計測項目(Martin's No.)	計測値	計測項目(Martin's No.)	計測値
1 脳頭蓋最大長	180.0	62 口蓋長	38.5
1 d ナジオン脳頭蓋長	174.0	63 口蓋幅	35.5
2 グラベラ・イニオン長	158.5	63 a 口蓋最大幅	39.0
2 a ナジオン・イニオン長	154.5	66 下顎角幅	83.4
3 グラベラ・ラムダ長	175.0	67 前下顎幅	44.3
3 a ナジオン・ラムダ長	174.0	68 下顎長	58.8
4 a 側頭骨最大長	79.0	68 a 下顎臼歯弦長	18.1
4 b 側頭鱗最大長	57.0	69 a 下顎結合高	25.7
8 脳頭蓋最大幅	122.0	69(1) 下顎体高	23.3
8 a 脳頭蓋側頭幅	122.0	69(2) 下顎体高(M2)	22.5
9 最小前頭幅	85.7	69(3) 下顎体厚	13.2
10 a 前頭骨最大幅	10.1	69 b 下顎体厚(M2)	15.1
12 最大後頭幅	100.0	70 下顎枝高	48.5
48 上顔高	51.0	70 a 投影下顎枝高	44.0
48(1) 歯槽部高	43.1	70(1) 前下顎枝高・筋突起高	50.0
48(2) 下顔高	41.2	70(2) 最小枝高	39.5
54 鼻幅	21.0	70(3) 下顎切痕深	12.5
57 鼻骨最小幅	6.7	71 下顎枝幅	30.1
57(2) 鼻骨上幅	7.2	71 a 最小下顎枝幅	30.1
61 上顎歯槽突起幅	60.5	71 b 下顎頭長	13.5
61(2) 前上顎歯槽突起幅	39.5	71(1) 下顎切痕幅	29.5

註1. 計測値の単位は、「mm」である。
註2. 被葬者が約10歳であるので、計測値の比較は掲載しなかった。

表2 二之宮谷地遺跡61号墓坑出土人骨歯冠計測値(宮崎、1994より引用)

歯種	計測項目	二之宮谷地61		中世時代人*		近世時代人*		現代人**	
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上顎	I 1	MD 10.3	9.6	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
		BL 7.3	7.7	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28
	I 2	MD	生前脱落	8.4	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13
		BL		6.9	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62
	C	MD	未萌出	8.4	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94
		BL			8.7	8.50	7.94	8.66	8.03
	P 1	MD	7.5	7.6	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38
		BL	10.0	10.4	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59
	P 2	MD		7.0	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02
		BL	未萌出	9.8	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41
	M 1	MD	10.9	10.9	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68
		BL	11.9	12.0	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75
下顎	M 2	MD	9.6*	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74
		BL	未萌出	12.4	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85
	M 3	MD	未萌出	未萌出	—	—	—	8.94	8.86
		BL	未萌出	未萌出	—	—	—	10.79	10.50
	I 1	MD	6.2	6.4	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48
		BL	6.2	6.22	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88
	I 2	MD	6.7	(5.7)	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20
		BL	6.6	6.8	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43
	C	MD	未萌出	未萌出	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07
		BL			7.82	7.33	8.04	7.39	8.14
	P 1	MD	未萌出	未萌出	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31
		BL	未萌出	未萌出	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06
顎	P 2	MD	未萌出	未萌出	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42
		BL	未萌出	未萌出	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53
	M 1	MD	11.7	11.9	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72
		BL	10.7	10.9	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89
	M 2	MD	未萌出	未萌出	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30
		BL	未萌出	未萌出	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53
	M 3	MD	未萌出	未萌出	—	—	—	—	10.96
		BL	未萌出	未萌出	—	—	—	—	10.28

註1. 計測値の単位は、すべて「mm」である。
註2. 中近世時代人の計測値は、Matsumura(1995)より引用。M3のデータは無い。
註3. 強調してある数字は、宮崎（1994）には、「19.6」とあるが、「9.6」の誤りであると推定される。

(3) 下高瀬上之原遺跡 [しもたかせうえのはら遺跡]
 所在地：群馬県富岡市下高瀬
 発掘調査：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 調査期間：1988(昭和63)年11月～1990(平成2)年5月
 報告書：『下高瀬上之原遺跡』(群埋文、1994)
 遺構：縄文時代多々な住居・弥生時代土坑・古墳時代竪穴住居・近世墓坑等。
 墓坑：12基の墓坑が出土しているが、この内、4号土坑が鉢被り葬である。

時代：近世
 副葬品：片口鉢〔唐津18世紀〕1点・碗1点・輪宝状の飾り金具6点・煙管雁首及び吸口1点・寛永通宝11点
 土坑形状：隅丸長方形
 土坑規模：長径1.09m・短径80cm・深さ50cm
 被葬者：4号土坑の被葬者は、青年期後半～壮年期前半〔35歳～45歳〕の男性であると推定されている(緑川、1994)。

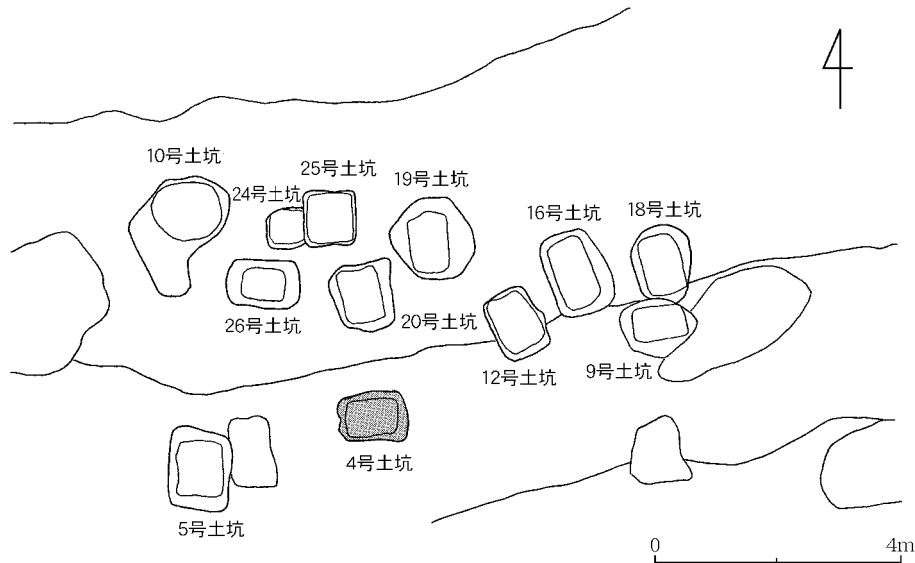


図8 下高瀬上之原遺跡墓坑位置図 [群埋文 (1994) を改変]

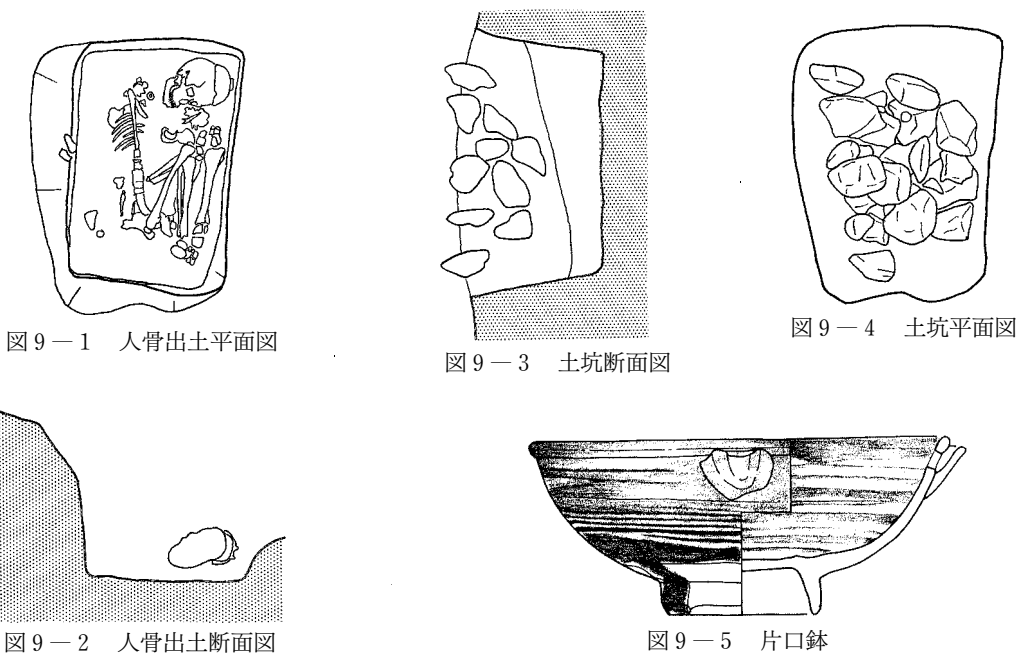


図9 下高瀬上之原遺跡4号土坑平断面図・出土遺物実測図 [群埋文 (1994) を改変]

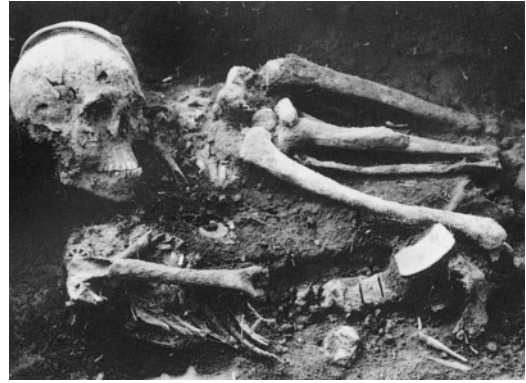


写真4 下高瀬上之原遺跡4号墓坑人骨出土状況写真[左：多数の石で覆われて片口鉢を被った状態、右：石を取り除いた状態]（群埋文、1994）



写真5-1 前面観



写真5-2 後面観



写真5-3 右側面観



写真5-4 左側面観



写真5-5 上面観



写真5-6 下面観

写真5 下高瀬上之原遺跡4号墓坑出土人骨頭蓋骨

緑川（1994）より抜粋

出土人骨の残存状態：頭蓋骨・下顎骨・右上腕骨・右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・右腓骨

被葬者の個体数：1 個体

被葬者の性別：男性。額はやや鉛直型、前頭幅はやや狭く、眉上弓は中等度に発達、眼窩上縁はやや厚く、男性らしい形態であった。右寛骨に残存する大寛骨切痕角度は小で男性と考えられた。長管骨（上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・腓骨）は比較的太く、頑丈な感じで男性らしい傾向である。

被葬者の死亡年齢：青年期後半～壮年期前半（35歳～45歳）。年齢推定のために観察可能な残存歯牙の咬耗状態について観察したところ、年齢と最も相関関係があると言われている切歯の内、下顎左右の中切歯及び下顎右側切歯が象牙質の面状咬耗であった。

本報告者註：緑川（1994）の報告は、主に、個体数・性別・死亡年齢を中心とした法医学的記載である。本出土人骨は、出土したままの状態で、クリーニング・復元・計測がされていない状態であったため、本報告者がクリーニング・復元・計測・写真撮影を実施した。

（被葬者の生前の身長）保存状態が比較的良かった、右上腕骨・左右大腿骨・左右脛骨の最大長から藤井（1960）の式を用い、被葬者の生前の身長を計算すると、約151.7

cm～154.5cmという結果になった。元北里大学の故平本嘉助による研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm、最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm、最小137.6cm] である。本被葬者は、江戸時代人男性としては小柄であるが、女性よりは身長が高かったということになる。

なお、クリーニングの結果、本人骨の左右寛骨には耳状面前溝が認められた。

通常、この溝は、女性に認められ妊娠・出産に伴うとされているが、欧米の研究ではまれに男性にも認められるという報告がある。

さらに、下顎右M1（第1大臼歯）・左右M2（第2大臼歯）及びM3（第3大臼歯）は、生前脱落し歯槽も閉鎖した状態である。

表4 下高瀬上之原遺跡4号土坑出土人骨歯冠計測値

齒種	計測項目	下高瀬上之原4号		中世時代人*		近世時代人*		現代人**			
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
上	I 1	MD	9.2	—	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55	
		BL	7.8	7.9	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28	
	I 2	MD	—	—	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05	
		BL	5.6	5.0	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51	
	C	MD	—	—	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71	
		BL	9.2	9.1	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13	
	P 1	MD	—	—	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37	
		BL	10.3	10.0	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43	
	P 2	MD	—	—	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94	
		BL	10.3	—	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23	
	顎	M 1	MD	—	—	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
			BL	12.6	12.3	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
M 2		MD	—	11.6	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74	
		BL	12.4	12.3	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31	
M 3		MD	—	—	—	—	—	—	8.94	8.86	
		BL	—	—	—	—	—	—	10.79	10.50	
下		I 1	MD	—	—	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47
			BL	6.1	6.1	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77
		I 2	MD	—	—	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11
			BL	7.0	6.5	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30
		C	MD	—	—	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
			BL	7.6	8.1	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50
	P 1	MD	—	—	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19	
		BL	8.8	9.2	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77	
	P 2	MD	—	死後脱落	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29	
		BL	8.0		8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26	
	顎	M 1	MD	生前脱落	13.0	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
			BL	脱落	11.6	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
M 2		MD	生前脱落	生前脱落	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89	
		BL	脱落	脱落	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20	
M 3		MD	生前脱落	生前脱落	—	—	—	—	10.96	10.65	
		BL	脱落	脱落	—	—	—	—	10.28	10.02	

註1. 計測値の単位は、すべて「mm」である。

表5 下高瀬上之原遺跡4号土坑出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

計測項目(Martin's No.)	下高瀬上之原遺跡4号土坑出土人骨	中世人骨*		江戸時代人骨**		現代人***	
		♂	♀	♂	♀	♂	♀
1 脳頭蓋最大長	173mm	184.2mm	177.9mm	181.9mm	175.4mm	178.9mm	170.8mm
8 脳頭蓋最大幅	140mm	136.5mm	131.8mm	139.8mm	136.8mm	140.3mm	135.9mm
8：1 頭蓋長幅示数	80.9(短頭)	74.2	74.2	76.9	78.1	78.5	79.7
17 バジオン・プレグマ長	140mm	137.2mm	128.8mm	137.5mm	133.3mm	138.1mm	132.5mm
17：1 頭蓋長高示数	80.9(高頭)	75.0	73.4	75.6	75.8	77.3	77.7
17：8 頭蓋幅高示数	100.0(狭頭)	99.8	97.6	98.6	97.5	98.6	97.7
1 + 8 + 17 / 3 脳頭蓋モズルス	151.0	152.4	146.4	153.1	148.7	—	146.8
5 頭蓋底長	93.0mm	103.5mm	93.0mm	101.9mm	97.7mm	100.7mm	95.6mm
11 両耳幅	111.0mm	119.2mm	113.5mm	126.2mm	120.9mm	124.9mm	118.8mm
12 最大後頭幅	109mm	107.8mm	104.4mm	109.9mm	105.8mm	108.4mm	104.2mm
12：8 横頭頂後頭示数	77.9	77.6	78.9	78.6	76.6	77.3	76.8
13 乳様突起間幅	98mm	103.7mm	100.6mm	104.0mm	99.2mm	102.4mm	97.6mm
7 大後頭孔長	32mm	34.7mm	34.1mm	35.9mm	34.6mm	35.0mm	33.7mm
16 大後頭孔幅	26mm	28.9mm	28.1mm	29.8mm	28.3mm	29.8mm	28.4mm
16：7 大後頭孔示数	81.3(狭)	82.7	85.9	83.4	82.1	85.2	84.4
25 正中矢状弧長	366mm	373.7mm	360.1mm	373.4mm	361.1mm	371.7mm	357.6mm
26 正中前頭弧長	123mm	126.5mm	120.9mm	126.7mm	123.7mm	127.4mm	122.1mm
27 正中頭頂弧長	120mm	129.4mm	124.4mm	127.7mm	123.9mm	125.1mm	121.0mm
28 正中後頭弧長	123mm	117.5mm	114.6mm	119.2mm	113.0mm	119.1mm	114.3mm
27：26 矢状前頭頭頂示数	97.6	102.7	103.3	101.1	100.7	98.6	98.9
28：26 矢状前頭後頭示数	100.0	95.1	94.4	94.2	91.4	93.6	93.9
28：27 矢状頭頂後頭示数	102.5	93.1	92.0	93.3	91.2	95.4	95.4
26：25 前頭矢状弧長示数	33.6	33.8	33.6	33.9	34.3	34.3	34.2
27：25 頭頂矢状弧長示数	32.8	34.5	34.6	34.2	34.3	33.7	33.8
28：25 後頭矢状弧長示数	33.6	31.9	31.9	31.9	31.3	32.0	32.0
29 正中前頭玄長	110mm	111.5mm	106.6mm	111.4mm	108.7mm	111.8mm	106.5mm
30 正中頭頂玄長	110mm	115.7mm	111.6mm	114.6mm	111.2mm	111.8mm	108.6mm
31 正中後頭玄長	100mm	99.3mm	99.6mm	99.1mm	96.8mm	100.4mm	97.0mm
29：26 矢状前頭彎曲示数	89.4	88.2	88.2	87.9	87.9	87.9	87.4
30：27 矢状頭頂彎曲示数	91.7	89.5	89.6	89.7	89.7	89.3	89.8
31：28 矢状後頭彎曲示数	81.3	82.9	84.2	85.7	85.7	84.5	84.9
48 上顔高	72mm	64.7mm	61.6mm	66.2mm	66.6mm	70.7mm	67.1mm
55 鼻高	52mm	51.1mm	46.9mm	52.5mm	49.5mm	52.0mm	49.0mm
61 上顎槽突起幅	64mm	65.2mm	60.7mm	66.5mm	64.8mm	65.8mm	61.7mm
62 口蓋長	52mm	46.3mm	43.6mm	44.8mm	44.0mm	44.0mm	42.7mm
67 前下顎幅	50mm	48.4mm	45.9mm	47.8mm	32.5mm	—	—
69 頤高	33mm	32.7mm	28.7mm	34.5mm	32.5mm	32.7mm	33.2mm
71 下顎枝幅	35mm	36.6mm	35.7mm	35.4mm	31.1mm	36.6mm	31.1mm



写真6—1 下高瀬上之原4号土坑出土人骨上肢骨



写真6—2 下高瀬上之原4号土坑出土人骨下肢骨

写真6 下高瀬上之原4号土坑出土人骨四肢骨

表6 下高瀬上之原遺跡出土人骨まとめ

土坑No	土坑形状	土坑規模(cm)			副葬品	被葬者		
		長径	短径	深度		個体数	性別	死亡年齢
4号土坑	隅丸長方形	109	80	50	片口鉢1点・碗1点	1個体	男性	青年期後半～壮年期前半(35歳～45歳)
5号土坑	隅丸長方形	123	96	80	肥前系青磁皿2点・寛永通宝16点	1個体	女性	老年期(60歳以上)
9号土坑	楕円形	112	88	48	肥前系陶器碗1点・寛永通宝11点・不読1点	1個体	男性	壮年期後半(45歳～55歳)
10号土坑	楕円形	123	102	70	土師質土器皿2点・永楽通宝1点・寛永通宝9点	1個体	女性	壮年期(40歳～55歳)
12号土坑	隅丸長方形	110	84	37	陶器皿2点・火打金1点・熙寧元宝1点・寛永通宝12点	1個体	男性	不明
16号土坑	隅丸長方形	134	91	59	陶器碗1点・皿2点・火打金1点・寛永通宝12点	1個体	不明	不明
18号土坑	隅丸長方形	122	98	68	煙管雁首1点・吸口1点・寛永通宝13点	1個体	男性	不明

表7 下高瀬上之原遺跡4号土坑出土頭蓋骨非計測の形質

観 察 項 目	4 号 土 坑		
	右	中央	左
前頭縫合		—	
眼窩上孔	破損		破損
副眼窩下孔	破損		破損
副頤孔	—		—
内側口蓋管骨橋	—		—
第3後頭顆		—	
前顆結節	—		—
卵円孔棘孔連続	—		—
鼓室骨裂孔	+		+
頸静脈孔二分	—		—
顆管開存	破損		破損
横頰骨縫合痕跡	破損		破損
頭頂切痕骨	—		+
アステリオン骨	—		—
後頭乳突縫合骨	—		—
外耳道骨腫	—		—
顎舌骨筋神経溝骨橋	—		—
ラムダ小骨		—	
舌下神経管二分	—		—
横後頭縫合痕跡	—		—

註1：「+」は有ることを、「—」は無いことを示す。

註2：「破損」は、人骨が破損していて観察不能であることを示す。

表8 下高瀬上之原遺跡出土人骨四肢骨計測値及び比較表

上 腕 骨	下高瀬上之原遺跡4号		由比ヶ浜南遺跡(中世)		近 世 人 骨		現 代 人	
	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1 上腕骨最大長	—	281mm	309.21mm	279.33mm	296.8mm	269.7mm	295.9mm	272.4mm
4 下端幅	破損	50mm	—	—	59.6mm	—	59.0mm	49.9mm
5 中央最大径	20mm	20mm	22.22mm	20.40mm	22.7mm	19.6mm	—	—
6 中央最小径	19mm	19mm	17.10mm	14.80mm	17.7mm	14.9mm	—	—
7 骨体最小周	破損	65mm	62.15mm	55.33mm	63.5mm	54.1mm	62.3mm	54.1mm
7 a 中央周	—	65mm	66.00mm	59.90mm	—	—	—	—
11 滑車幅	破損	21mm	21.47mm	20.00mm	23.1mm	18.8mm	23.6mm	19.1mm
6：5 骨体断面示数	95.0	95.0	77.04	72.94	78.3	76.6	—	—
7：1 長厚示数	—	23.1	20.13	19.15	21.4	20.1	21.1	19.9
橈 骨	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
4 骨体横径	17mm	17mm	16.45mm	14.40mm	16.6mm	14.4mm	16.5mm	14.6mm
4(2) 頸横径	破損	13mm	13.19mm	12.25mm	—	—	—	—
5 骨体矢状径	12mm	12mm	11.97mm	10.60mm	11.9mm	9.8mm	11.8mm	9.8mm
5(2) 頸矢状径	破損	13mm	14.80mm	13.00mm	—	—	—	—
5(4) 頸周	破損	45mm	45.24mm	40.40mm	—	—	—	—
5：4 骨体断面示数	70.6	70.6	73.11	73.43	71.8	68.4	71.8	67.4
大 腿 骨	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1 大腿骨最大長	392mm	395mm	415.85mm	386.50mm	413.8mm	377.9mm	412.1mm	381.8mm
6 骨体中央矢状径	(25mm)	27mm	27.32mm	25.06mm	28.3mm	24.8mm	27.6mm	24.5mm
7 骨体中央横径	(26mm)	29mm	26.27mm	24.13mm	27.4mm	24.1mm	26.3mm	23.0mm
8 骨体中央周	(83mm)	90mm	84.90mm	77.69mm	87.2mm	76.9mm	83.7mm	73.8mm
9 骨体上横径	(32mm)	34mm	31.01mm	28.69mm	30.7mm	26.5mm	31.0mm	27.9mm
10 骨体上矢状径	23mm	24mm	23.95mm	21.94mm	27.8mm	25.5mm	25.6mm	22.4mm
15 頸垂直径	28mm	29mm	32.16mm	29.00mm	32.5mm	28.3mm	33.6mm	28.1mm
16 頸矢状径	26mm	24mm	23.33mm	21.50mm	25.8mm	23.7mm	27.4mm	23.1mm
18 頭垂直径	破損	44mm	44.49mm	40.83mm	46.5mm	40.9mm	46.4mm	40.2mm
6：7 骨体中央断面示数	(96.2)	93.1	104.49	104.2	103.9	103.1	105.4	107.3
10：9 骨体上断面示数	(71.9)	70.6	77.68	76.54	91.2	97.3	82.2	80.9
16：15 頸断面示数	92.9	82.8	—	—	79.5	84.1	81.2	82.0
脛 骨	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1 a 脛骨最大長	326mm	322mm	338.52mm	331.50mm	331.2mm	305.8mm	325.3mm	302.4mm
4 粗面位最大矢状径	42mm	40mm	—	—	40.6mm	36.5mm	42.5mm	38.0mm
5 粗面位最小横径	34mm	34mm	—	—	43.0mm	39.6mm	43.0mm	40.5mm
6 最大下端幅	42mm	44mm	51.71mm	49.00mm	49.6mm	43.6mm	51.3mm	45.8mm
7 下端矢状径	32mm	33mm	36.47mm	32.33mm	35.7mm	31.3mm	37.0mm	32.5mm
8 中央最大矢状径	28mm	26mm	29.26mm	26.14mm	28.9mm	25.3mm	28.7mm	25.7mm
8 a 栄養孔位最大径	32mm	32mm	33.34mm	29.29mm	32.9mm	28.8mm	31.8mm	29.0mm
9 中央横径	20mm	21mm	21.05mm	19.71mm	21.6mm	18.9mm	22.8mm	20.3mm
9 a 栄養孔位横径	22mm	23mm	23.50mm	21.57mm	23.7mm	21.2mm	25.1mm	22.5mm
10 骨体中央周	80mm	80mm	79.63mm	72.29mm	79.4mm	70.0mm	79.0mm	70.3mm
10 a 栄養孔位周	87mm	89mm	89.93mm	81.00mm	89.3mm	78.1mm	88.9mm	81.9mm
9：8 中央横断面示数	71.4	80.8	72.12	75.41	74.7	72.4	78.7	78.7
9 a：8 a 扁平示数	68.8	71.9	70.65	73.78	72.2	73.6	78.3	77.3

(4) 宮崎浦町遺跡 [みやざきうらまち遺跡]

所在地：群馬県富岡市宮崎

発掘調査：富岡市教育委員会

調査期間：1998(平成10)年5月～同年9月

報告書：『宮崎浦町遺跡』(富岡市教委、1999)

遺構：弥生時代後期竪穴住居・古墳時代後期竪穴住居及び掘立柱建物・奈良時代竪穴住居・平安時代竪穴住居・中世～近世竪穴住居及び墓坑等。

墓坑：墓坑は4基出土しているが、1号墓坑が鉢被り葬であり、2号墓坑が鍋被り葬である。

時代：近世

副葬品：

① 1号墓坑：播鉢1点・大甕？

② 2号墓坑：鉄鍋1点・寛永通宝(点数の記載無し)・煙管(部位・点数・実測図の記載は無いが、写真で判断する限り、寛永通宝は少なくとも7点以上はある。また、

煙管も雁首及び吸口が出土している)。

土坑形状：

① 1号墓坑：楕円形

② 2号墓坑：方形

土坑規模：

① 1号墓坑：長径1.8m・短径1.5m・深さ60cm

② 2号墓坑：一辺1.2m・深さ70cm

人骨：報告書には、人骨の出土の有無が記載されていない。発掘担当者に問い合わせをしたが、残念ながら、人骨は出土したものの取り上げていないとの回答であった。



写真7 宮崎浦町遺跡2号墓坑(富岡市教委、1999)

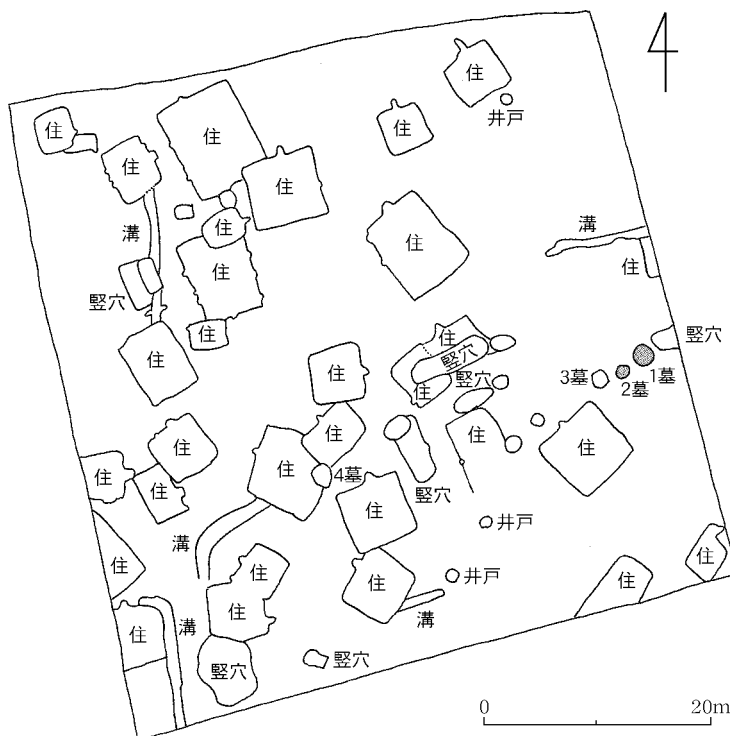
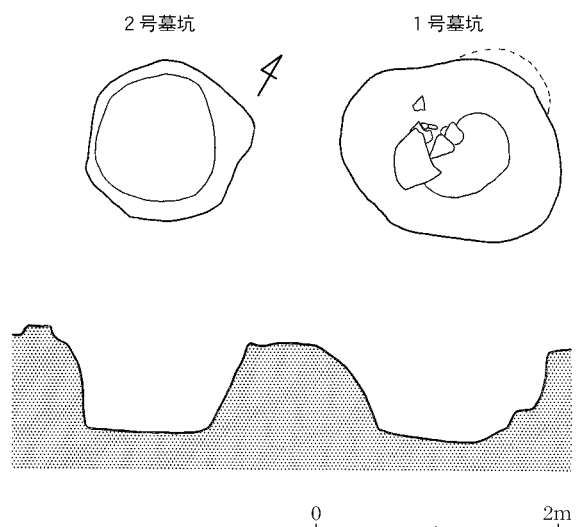
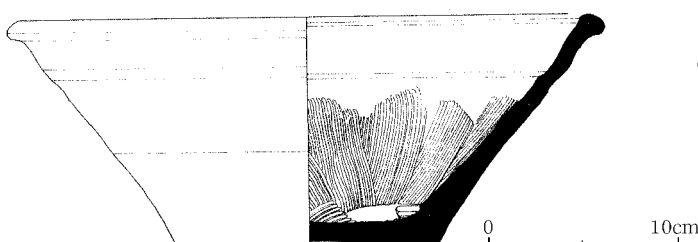
図10 宮崎浦町遺跡墓坑位置図
[富岡市教委(1999)を改変]図11 宮崎浦町遺跡1号・2号墓坑平面断面図
[富岡市教委(1999)を改変]

図12 宮崎浦町遺跡1号墓坑出土播鉢(左)・2号墓坑出土鉄鍋(右)実測図(富岡市教委、1999)

(5) 塚越遺跡〔つかごし遺跡〕

塚越遺跡では、中世の終わり頃の鍋被り葬が出土しているということが、かみつけの里博物館で平成12(2000)年2月～同年4月まで実施された企画展『鍋について考える』で紹介されている(かみつけの里博物館、2000)。

桐生市教育委員会に問い合わせをしたが、報告書は作成されておらず、詳細は不明である。

5. おわりに

群馬県の、「鍋被り葬」及び「鉢被り葬」の発掘調査事例を検討した。群馬県では、5遺跡6例が認められた。

(1) 横瀬古墳群の2号墓坑は鉄鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であり、被葬者には古病理として梅毒の可能性が認められた。

(2) 二之宮谷地遺跡の61号墓坑は、播鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、被葬者には古病理は認められなかった。二之宮谷地遺跡61号墓坑出土人骨は、報告書掲載段階で、人類学的観察及び計測がなされていなかったため、今回、本報告者がクリーニング・復元を行い、観察及び計測を行った。

(3) 下高瀬上之原遺跡の4号土坑は、片口鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、被葬者には古病理は認められなかった。

(4) 宮崎裏町遺跡の1号墓坑は播鉢を副葬品とした「鉢被り葬」であり、2号墓坑は鉄鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であったが、残念ながら人骨は取り上げられておらず被葬者の古病理の有無の確認は不可能であった。

(5) 塚越遺跡は、内耳鍋を副葬品とした「鍋被り葬」であるが、人骨を実見することはできなかったため、被葬者の古病理の有無の確認はできなかった。

上記6例の内、「鍋被り葬」が3例・「鉢被り葬」が3例と半々で認められた。この内、人骨が調査されているのは3遺跡3例であり、横瀬古墳群2号墓坑出土人骨には梅毒の可能性が認められたが、他の二之宮谷地遺跡61号墓坑出土人骨及び下高瀬上之原遺跡4号土坑出土人骨の2例には古病理は認められなかった。但し、ハンセン病及び梅毒は、罹患していても人骨に痕跡を残す割合は低いために、確実に病気に罹っていなかったとまでは断定できない。

したがって、群馬県において、「鍋被り葬」及び「鉢被り葬」の事例として引用する際は、横瀬古墳群2号墓坑の「鍋被り葬」・二之宮谷地遺跡61号墓坑の「鉢被り葬」・下高瀬上之原遺跡4号土坑の「鉢被り葬」の3例をもって事例とすべきであると提唱したい。なお、塚越遺跡の「鍋被り葬」については、機会を改めて出土人骨を調査し、報告したいと考える。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、写真及び図版の転載をご許可いただいた富岡市教育委員会に感謝いたします。また、富岡市教育委員会の石川雅俊氏、桐生市教育委員会の萩原清史氏、群馬県埋蔵文化財調査事業団の石守 晃氏・大西雅広氏にご協力をいただいた。記して、感謝いたします。

引用文献

〔和文〕(著者名の五十音順)

- かみつけの里博物館 2000 『鍋について考える』、かみつけの里博物館
 桐原 健 1974 鍋を被せる葬風、「信濃」、26(8):63-70
 鈔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『二之宮谷地遺跡』
 鈔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994 『下高瀬上之原遺跡』
 桜井準也 1992 近世の鍋被り人骨の出土例とその民俗学的意義、「民族考古」、(1):85-98
 桜井準也 2001 近世の鍋被り葬と村境:村落空間論との関わりから、「民族考古」、(5):31-50
 桜井準也 2004 「近世の鍋被り人骨について」、『墓と埋葬と江戸時代』(江戸遺跡研究会編)、p.154-178
 鈴木隆雄 1998 『骨から見た日本人』、講談社
 鈴木隆雄 2001 「骨考古学:ハンセン病」、『The Bone』、15(5):97(507)-101(511)
 関根達人 2003 鍋被り葬考:その系譜と葬法上の意味合い、「弘前大学人文学部人文社会論叢:人文科学篇」、(9):23-47
 土井卓治 1983 「第5章. 葬りの源流」、『日本民俗文化大系2. 太陽と月』、小学館、p.257-310.
 都丸十九一 1972 『日本の民俗10. 群馬』、第一法規出版
 富岡市教育委員会 1990 『横瀬古墳群』
 富岡市教育委員会 1999 『宮崎浦町遺跡』
 平瀬謙英 1979 「盆の先祖祭とナマボトケの問題」、『葬送墓制研究集成』、名著出版、p.310-321
 緑川 順 1994 「近世土坑出土人骨について」、『下高瀬上之原遺跡』、鈔群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.468-470.
 宮崎重雄 1994 「二之宮谷地遺跡の人骨について」、「二之宮谷地遺跡」、鈔群馬県埋蔵文化財調査事業団、p.351-362.
 森本岩太郎・吉田俊爾 1990 「Ⅷ. 横瀬古墳群出土人骨、歯について」、『横瀬古墳群』、群馬県富岡市教育委員会、p.115-129
 山本俊一 1993 『日本らい史』、東京大学出版会

〔英文〕(著者名のアルファベット順)

- Aufderheide, A.C. & Rodriguez-Martin, C. 1998 “*Encyclopedia of Human Paleopathology*”, Cambridge University Press
 Brothwell, D. 1981 “*Digging up Bones*”, Oxford University Press.
 Brothwell, D. & Sandison, A.T. (eds.) 1967 “*Diseases in Antiquity*”, C.C. Thomas
 Ortner, D.J. & Putschar, W.G. 1981 “*Identification of Paleopathological Conditions in Human Skeletal Remains*”, Smithsonian Institution Press
 Ortner, Donald J. 2003 “*Identification of Pathological Conditions in Human Skeletal Remains* (2nd ed.)”, Smithsonian Institution Press.
 Steinbock, R.T. 1976 “*Paleopathological Diagnosis and Interpretation*”, C.C. Thomas
 Waldron, Tony 2008 “*Paleopathology*”, Cambridge University Press.